高山寺蔵古訓点資料に於ける、「類同・例示」等の表現法

佐々木　峻

目次

一　はじめに
二　高山寺蔵古訓点資料に於ける、「類同・例示」等の表現法――特に、今昔物語集の表現法と比較して――
三　「類同・例示」等の表現法に関わる、格助詞ノ・ガの待遇機能
四　おわりに（特に、前稿との関連について）

一、はじめに

標題の、「類同・例示」等の表現法とは、一般には、「比況」の術語を以って呼ばれる、「如シ」「様なり」を中心とする、一類の表現法を指すものである。

右の表現法が、日本語表現法の体系の中にあって、如何なる地位を占めるものであるか、今、遽かには述べる用意が無いけれども、国語史学の分野に於いて、夙に注目されきたったことは、周知の如くである。(1)

本稿は、前稿(2)で試みた、院政・鎌倉時代の五文献を対象とした小報告に続くものである。(3)

以下に取上げる高山寺蔵の古訓点資料は、左の、三点計十三巻である。

㈠　論語　清原本巻第七・第八　二巻

中原本巻第四・第八　二巻

(二)　史記　殷本紀・周本紀　二巻

(三)　荘子　甲巻　巻第二十七・第二十八・第三十・第三十一・第三十三　五巻

乙巻　巻第二十三・第二十六　二巻

尚、右文献の閲覧・調査を御快諾下された高山寺当局、また、研究の便宜及び種々御指導を賜った、高山寺典籍文書綜合調査団団長、築島裕先生、鎌倉時代語研究会代表者、小林芳規先生に、深甚の謝意を表するものである。

二　高山寺蔵古訓点資料に於ける、「類同・例示」等の表現法――特に、今昔物語集の表現法と比照して――

高山寺蔵古訓点資料に於ける、「類同・例示」等の表現法の特色を把握するために、今昔物語集のそれとの比較を試みる。今昔物語集は、大部な文献であるため、「如シ」「様なり」の用法・様態は極めて多彩であろうと予想され[4]、且、その前半部は訓読性の濃い文体であって、その前半部に「如シ」が偏在している点等からも、比較資料として有益であろうと考えたからである。

先ず、連体形の用法について見る。

「如シ」の連体形「如キ」は、

体言＋ノ如キこと（コト）（論語・中原本八104）

体言＋ガ若き〔者（モ）の〕には（荘子二十七55・二十八44）

動詞連体形＋ガ若キこと（荘子二十八123）

用例の片仮名は原本のママ、平仮名はヲコト点、（　）内は補読である。又、所在を示す場合、漢数字は巻序、洋数字は行数を示す。以下同じ。

の如く、形式名詞「コト・モノ」に続く例が3例認められる。助詞に続くものは、次の4例である。

体言＋ノ如キヲ（論語・清原本八92）

体言＋ノ如（キ）ダモ（論語・中原本四71）

連体形＋ガ若キヲ（論語・中原本四38）

連体形＋ガ若キに（荘子二十七77）

以上の形態と一致するものは、今昔物語集には、見出されない。このことは、一見、奇異な現象とも見られようが、今昔物語集に於いては、「カクノ如キ」の「〜キ」形が、連用修飾に立つということと、或いは関係があるのかもしれない。「カクノ如キ」は、高山寺本（以下、このように略称する）では、

カク（若・是）ノ如キ＋体言（論語・清原本七67、八96、中原本八109）（荘子三十三86）

カクノゴトキ（此如・是若）ハ・は（論語・中原本四1053）（荘子二十六107108）

の9例が認められる。これらも亦、今昔物語集には認められない。

次に掲げる「如キナル」以下のいずれも亦今昔物語集に見出されないことは、注目に値する。

〔ゴトキナル〕（3例）＜今昔ニナシ。＞

カクノゴトキ（此若）ナル＋体言（論語・清原本八54）

カクノゴトキ（此若）ナルヲ（論語・清原本八56、中原本八59但、是は補読例）

〔ゴトクナル〕（1例）

カクノゴトク（是若）なる而已ノミ…（荘子二十八169）＜今昔ニナシ。＞

〔ゴトクスル〕（2例）

連体形＋ガ如（ク）する＋体言（荘子二十七60）

カクノゴトク（是如）スル＋体言（荘子三十4）

第一例に一致する例は今昔になく、「如クシテ」と、テに続く連用形が5例見られるのみである。（巻三、五、六、十、二十四）

又、第二例に一致する例も皆無で、

カクノ如クシテ…巻一4例、巻二3例、巻三1例、巻四1例、巻五6例、巻六1例、巻七1例、巻十3例、巻十九5例、巻二十四1例

カクノ如クシ畢テ…巻四1例

の形態のもののみである。

〔ゴトクニスル〕（2例）

連体形＋ガ如クニ（スル）＋体言（論語・清原本八37）

連体形＋ガ如（ク）にする＋体言（論語・中原本八37）

第一例は補読例であって確例とはなし難い。今昔では、連用形「如クニシテ」が1例見られるのみである。（巻十九）

〔ゴトクンスル〕（2例）

「ゴトクンスル」は、高山寺本の中にあっても、特異な事例である。もとより今昔には存しない。

連体形＋如クンする＋体言（論語・清原本八37）

連体形＋如クムスル＋体言（論語・中原本八37）

〔ゴトクアル〕[5]（4例）

この形態も、今昔には見出されない。

体言＋ガ若クアル＋体言（荘子二十八65 191 213）

体言＋ノ若クアル＋体言（荘子二十八193）

今昔には、「ノ如クアリ」が2例認められる。（巻十九）高山寺本と今昔とのズレは、偶然のことなのかどうなのか。尚、

右第一例は、「体言＋ガ如クアル」とあって、他の用例とは著しく隔る用法を見せている。（体言の下には、ノが来るのが普通。）これについては、次節（第三節）で触れる。

「カクノ如クアル」（荘子二十八150、三十三111）は、今昔にも5例認められる。（巻三1例、巻四1例、巻十3例）

次に、連用形の用法について見る。これには、

〜ノ・ガ如ク　　〜ノ如クニ

〜ノ如クニシテ　　〜ノ如クンシテ

の四種が認められる。連用形の用法の中心が連用修飾にあるのは当然のことであり、その点では、今昔物語集でも同様である。

〔ゴトク〕（10例）

体言＋ノ如ク（史記・周本紀138 138 138）

右は、今昔にも多数認められる。「如シ」の代表的用法だからであろう。

巻一12例　巻二12例　巻三18例　巻四9例　巻五13例　巻六10例　巻七13例　巻十21例　巻十九20例　巻二十四4例

巻二十九2例（前半部への偏在分布であるさまが顕著である。）

連体形＋ガ如・若ク（荘子三十三149 149）（今昔13例）

連体形＋ガ如・若ク中止法（論語・中原本四89 99）（今昔には無し。）

斯ノゴトク（論語・清原本八53）

斯ノ如ク而已ノミ乎ヵ（論語・清原本七116）

是の如（ク）は（荘子二十六67）

の如く、副詞法や助詞に続く用法がいくらか認められる。これも、今昔によく通じる。

巻一7例　巻二8例　巻三17例　巻四17例　巻五12例　巻六4例　巻七5例　巻十8例　巻十九4例　巻二十四6例

（偏在分布である点、前条に等しい。）

尚、「如ク」の前に、ノ・ガ助詞を持たぬ例は、高山寺本には皆無であるが、今昔には、之が若干例認められることは、注目してよい。

（今昔）連体形＋如ク（巻三2例）

〔ゴトクニ〕（2例）

この語法は、高山寺蔵古訓点資料では栄えていない。就中、論語計四巻には、確例は一例も見出されない。左は、ヲコト点の「に」があり、「ゴトクニ」と訓める例である。

体言＋ノ（ゴトク）に（史記・殷本紀51）

（今昔）巻一2例　巻三2例　巻四6例　巻五9例　巻六2例　巻七1例　巻十2例　巻十九3例　巻二十四1例

計28例

カクノ如（ク）に（荘子三十一103）

（今昔）カクノ如クニテハ（巻十1例）

今昔では、右の外に、

体言＋ガ如クニ（巻四1例）

連体形＋ガ如クニ（巻一1例　巻三3例　巻六3例　巻七1例　巻十1例　巻二十四1例）

その他の「如クニ」形が計12例

の如く、かなりの用例数が認められ、高山寺本、就中、論語との大きな隔りを見せるのである。

〔ゴトクニシ〕（4例）〔ゴトクンシテ〕（3例）

体言＋ノ（ゴトク）にシて（荘子三十三158 166）

カクノゴトク（是如）ニ（に）シテ（て）（史記・周本紀529）

前者は、今昔巻三・二十四に各1例ずつあり、後者については例が存しない。

体言＋ノ若クンシテ（論語・清原本七25、清原本八22）

カクノ如クンシテ（論語・清原本八54）

「ニ」の撥音化した「ゴトクンシテ」は、今昔には皆無であり、高山寺本内部にあっても、清原本にのみ見られる特異形態である。清原家訓法の一特色を担うものとして差支えないかもしれない。(6)

次に、終止形の用法について述べる。これについては、猶詳述すべき諸問題が存するが、すべて別稿に譲り、今は略述するにとどめておく。

〔ゴトシ〕（52例）

体言＋ノ如シ（論語・清原本八22 22、中原本四29 30 67 71）（史記・周本紀427）（荘子二十六29、二十七34、二十八191、三十三176 176 176 183）

猶ナホ（シ）…体言＋ノ〔猶〕シ（論語・清原本七29 112 117、清原本八46 118、中原本四23 57 66、中原本八47 138）（荘子三十三139）

連体形＋ガ如・若・猶シ（論語・清原本七109、清原本八20 22、中原本四66 71 89 124、中原本八19）（史記・周本紀388 389）（荘子二十六12、二十七79 102 102、二十八123 218、三十55、三十三36 144 149 177 177 191）

右の如く、かなりの用例を数えることができる。今昔にも、同様に、多数の用例が認められる。

（今昔）

体言＋ノ如シ…巻一13例　巻三7例　巻四7例　巻五6例　巻七15例　巻十8例　巻十九1例　巻二十四1例　計58例

連体形＋ガ如シ…巻一6例　巻三6例　巻四10例　巻五4例　巻六4例　巻七6例　巻十9例　巻十九2例　巻二十二1例　巻二十四1例　計49例

今昔での総計は107例となり、前半への偏在分布ではあるが、使用頻度はかなりのものと言えよう。高山寺本と今昔との間での共通度は、連用形「如ク」の場合にもまして高いものがある。因みに、今昔に於ける、終止形「様なり」は、

体言＋の様なり…巻十六1例　巻十九1例　巻二十七2例

連体形＋様なり…巻十六1例　巻二十四1例　巻二十六3例　巻二十七1例　巻二十八1例　巻三十1例（但、形容詞連体形＋様なり）　巻三十一1例

終止形＋様なり…巻十九1例

の計14例で、「如シ」終止法に比べて、はるかに使用頻度が低い。「類同・例示」の表現法に於ける終止法と非終止法との間にも、一種の文体差が存するのかもしれない。

茲カクノ若シ（史記・殷本紀60）

之カクノ如シ（史記・周本紀379）

是（ノ）如（シ）（荘子二十六68）

此の如シ（荘子三十三83）

慣用的なこの「カクノゴトシ」が、高山寺本では僅かに4例（論語には皆無）で、余り栄えていない。尤も、これは、原漢文との相関でとらえるべき問題でもあろう。（「〜ゴトシ」は決して少なくはなかった。）

今昔の状況は、左の如くである。

カクノ如シ…巻一5例　巻三3例　巻四4例　巻六4例　巻七2例　巻十2例　巻十九1例　巻二十四1例

カクノ如シト…巻一1例　巻四1例

カクノ如シトナム…巻四1例　巻十九1例　以上総計26例

尚、今昔には、「連体形＋如シ」（格助詞ガをとらない）が3例ある。（巻五・六・十）

〔ゴトクナリ〕

猶ナホ…体言＋ノ〔猶〕ク（ナリ）（論語・中原本四120）

猶ナホ…連体形＋ガ〔猶〕ク（ナリ）（論語・中原本八41）

右での語尾「ナリ」は、いずれも補読であるが、「ク」の仮名が有って文終止の箇所である故、「ゴトクナリ」と訓むことに異論はないと思う。「ゴトシ」が、高山寺本の論語・史記・荘子の各巻に存したのに比し、この「ゴトクナリ」が、ひとり中原本に偏っているのは、注目してよいことではあるまいか。

今昔の状況は左の如くである。

体言＋ノ如クナリ…巻一3例　巻二1例　巻三7例　巻四1例　巻五1例　巻六1例　巻七1例　巻十3例

連体形＋ガ如クナリ…巻五1例

連体形＋如クナリ…巻五1例

尚、今昔には、高山寺本には存しない、「如キナリ」が33例、「如シナリ」が9例存するが、これらについては、日本古典文学大系の補注等に譲り、ここには再説しない。

〔ゴトクス〕

連体形＋ガ如・若・猶クス（論語・中原本四124 124 124、中原本八19 151）

〔ゴトクニス〕〔ゴトクンス〕

体言＋ノ如クニス（史記・周本紀237）

連体形＋ガ如（ク）にス（論語・中原本八150）

連体形＋ガ如クンス（論語・清原本八129 129）

「ゴトクス」「ゴトクニス」は、論語の中原本にのみ見え、「ゴトクンス」が清原本にのみ見えるのは、「ゴトクンスル」「ゴ

トクンシ」の場合に合わせて[7]、注目に値しよう。（但、「如コトクムスル」は中原本にあった。ただ、これは、右傍仮名訓であり、朱のヲコト点には、「如（ク）にする」とあるのが注意せられる。）

尚、今昔には、この形態のものは不存である。

未然形の用法では、「ゴトケム」の古語法[8]が注目せられる。

体言＋（ノ）如コトケム（論語・清原本七47）

形容詞連体形＋（ガ）〔之〕若ケムヤ〔也〕（論語・清原本七53）

第一例（47行）は二訓併記の最右訓、第二例（53行）は左訓で、共に合点が付されている。特定の意識に支えられた付訓なのであろう。尚、今昔には、これは存しない。

その他の未然形用法として、

形容詞連体形＋ガ若コトクアラムヤ（論語・清原本七53）

連体形＋ガ若（クアラ）ク耳（荘子二十七61）

（今昔では、「連体形＋ガ如クナム有ツル」巻二十四の類似形が1例認められるのみである。）

連体形＋ガ如コトキニアラ不ス（論語・清原本八9）

今昔では、この形態は認められない。「ゴトクナラ」は、

体言＋ノ如（ク）ナラは（荘子三十三158）

体言＋ノ如（ク）ナラ令（メムト）欲ス（荘子三十三155）

連体形＋ガ如（ク）ナラ不（論語・中原本8）

猶…連体形＋（ガ）〔猶〕（クナラ）不乎（荘子二十八220）

最後の例は、「ナラ」が補読である故省くとして、第一例（荘子三十三158）に合致するものは、今昔に唯1例存する。（巻四）

単に未然形「如クナラ」ということであれば、他に7例が見出される。左にそれらを掲げる。

体言＋ノ如クナラム…巻一3例

体言＋ノ如クナラムト…巻二・四に各1例

体言＋ガ如クナラム…巻一1例

カクノ如クナラム…巻四1例

いずれも「ム」に続く形で、「シム」に続くものは見当らない。今昔には、「シカノ如シナラム」という特異形が1例認められる。（巻十）

「ゴトクニス」の未然形「ゴトクニセ」は、

体言＋ノ如（クニセ）〔使シ〕ム（史記・周本紀237）

の1例のみである。但、「クニセ」は補読である。（今昔には不存である。）

「ゴトキナリ」の連用形「ゴトキニ」の一特定用法とせられる「ゴトキンバ」[9]が4例存する。いずれも、論語清原本に見出される点が注目に値する。（「ゴトクンスル」「ゴトクンシ」等の訓と軌を一にするものであろう。）

体言＋（ノ）若コトキンハ（七25）

是カクノ如コトキンハ（七58 59 61）

第一例は左訓で左右二つの合点が付されている。これが何を意味するか、今は未詳であるけれども、第二の3例は、清家の訓法の特色を示すものと見てよいのではあるまいか。もとより、この形態は、今昔には不存である。

命令形の用法として、「ゴトクアリ」の命令形が1例認められた。

体言＋ノ如クアレ（史記・周本紀138）

右の「ゴトクアレ」は、極稀な、珍重すべき例ではあるまいか。[10] もとより、今昔にも見出せない。

高山寺本には、已然形の用法は、まったく認められなかったが、今昔では、

体言＋ノ如クナレドモ…巻四1例

が存した。「様なれども」は、

巻四2例　巻十1例　巻二十1例　巻二十六1例　巻二十八2例　巻二十九2例　巻三十1例

と、計10例を見出すことができた。

以上、「如シ」及びそれの類似形態に関し、高山寺蔵古訓点資料の状況を今昔物語集の諸形態・諸用法に比照しつつ概観した。その結果、

(1) 論語に於ける、清原訓と中原訓との異同

(2) 史記に於ける、殷本紀の訓と周本紀の訓との差違

(3) 荘子各巻内での差違

等についても、或る程度明らかにすることができたかと思う。

尚、高山寺本に「様なり」が一例も存しないことは、改めて説くまでもないことである。

三　「類同・例示」等の表現法に関わる、格助詞ノ・ガの待遇機能

通常、「如シ」「如クナリ」等に格助詞が下接する場合、ノは体言を承けて「ノ如シ」となり、ガは連体形を承けて「ガ如シ」となる。（今昔物語集では、ノもガも承けないで、直接「如シ」等に続く場合のいくらか存することは、前節で指摘した。）

ところが、高山寺本古訓点資料のうち、荘子に、左の如き例がある。

①体言＋ガ若き〔者(モ)のには〕（二十七55、二十八44）

②体言＋ガ若（ク）ある〔者(モ)のは〕（二十八65 191 413）

巻による偏りはあるが、いずれも（5例）片仮名表記の確例で、「体言＋ガ如〜」とある。これら、一見、例外とも見られる用例に共通するのは、ガの承ける体言が、すべて人物である点にある。それらの人物は、①が、「参」「王子搜」であり、②が「顔闔」「卞随・務光」「伯夷・叔斉」の5組7名である。ここで想起されるのは、近時発表せられた、近藤泰弘氏の御論文である。[11] 氏は、高山寺蔵の史記殷本紀・周本紀を中心とし、更に、

A　毛利家蔵呂后本紀延久五年点

B　東北大学蔵孝文本紀延久五年点

C　東洋文庫蔵秦本紀天養二年点

D　東洋文庫蔵夏本紀鎌倉初期点

E　書陵部蔵群書治要巻十二建治二年点

の訓点資料5点について精査せられ、高山寺本史記を初め、A〜Eに、ノ・ガに待遇機能差の存することを証せられた。私見によれば、高山寺本論語にも、これが認められる。右の、荘子巻二十七・二十八に認められる、承接上の例外が、待遇表現法上のノ・ガの機能差に起因するものと考えられる蓋然性が存するのではないか。

尚、今昔物語集にも、同趣の例が認められる。

ⓐ体言＋ガ如ク…巻一・巻七に各1例

ⓑ体言＋ガ如クニ…巻四1例

ⓒ体言＋ガ如クナラム…巻一1例

の4例である。これらの上接体言は、ⓐⓑの計3例が「我が」、ⓒが「扇提羅ガ」とあり、これらのガも、恐らくは、謙態（もしくは卑態）としての、下位者待遇表現に係るものと考えてよさそうである。

以上の、高山寺本荘子や今昔物語集でのガの違例が、待遇表現法に係るものだとすれば、先に触れた近藤氏の論考をも踏

まえて、次の点が注目すべき事項となろう。

(1)「体言＋ノ如〜」「連体形＋ガ如〜」の語法よりも、待遇表現法に係るノ・ガの機能表示が優先する。

(2) 待遇機能差を表示するノ・ガは、「曰ク（イハ）」「曰バク（ノタウ）」に続く場合と、「如〜」に続く場合とで、機能差が存するかもしれない。（これは、加点者の意識にも関わることであろう。）

四　おわりに（特に、前稿との関連について）

前稿[12]で取上げた五文献は、左の如くである。

1　法隆寺蔵法華百座聞書抄院政期書写本
2　中山法華経寺蔵三教指帰注院政末期頃書写本
3　高山寺蔵光言句義釈聴集記正安元年校本
4　高山寺蔵古往来院政末期書写本
5　梅沢彦太郎氏蔵古本説話集鎌倉中期頃書写本

右での、「類同・例示」等の表現法の状況（前稿）と、本稿での主題、高山寺本古訓点資料の状況とを、併せ見つつ、且、今昔物語集の用法にも比照しつつ、以下、略述に努める。

(1)「様なり」は、『古往来』を除く、他四文献に認められた。ここに、『古往来』と高山寺本古訓点資料との近似性が認められると共に、他四文献との隔たりが、顕著に認められる。

(2) 前稿で取扱った五文献での「〜如〜」の状況を要約すれば、凡そ、左の如くである。

①法華百座聞書抄

「如此（カクノゴトシ）」（ウ5）1例のみ。他はすべて「様なり」。

②三教指帰注

連体形の用法では、「如（キノ）是ノ」（13ウ8）「如（キ）是（ノ）」（6オ6）の2例であるが、いずれも補読例であって、確例とはなし難い。

連用形の用法では、「如ク此（ノ）」（13オ7）「如（ク）是（ノ）」（9オ8・29オ1）の3例にとどまり、しかも、第一例のみが確例であるに過ぎない。これらは、高山寺本にも、今昔にも見られた形態である。

終止形の「如（シ）是（ノ）」（19オ2・28オ3）の2例は、いずれも補読によるものであって、考察の対象外となる。

③光言句義釈聴集記

連体形の用法としては、「連体形＋ガ如キハ」（上250）「如（キ）此ノ」（上535）がある。高山寺本・今昔共に右の形態は存しない。（右の第2例の「如(キ)」は「如キノ」の可能性もある。とすれば、今昔にも、かなりの用例数を見出し得る。）

「〜如キノ」は、高山寺本には存しないが、本資料には、「体言＋ノ如キノ」（上181）（今昔では巻四に1例）「カクノ如キノ」（上344 348 456下116—以上確例、上486下永35 47—以上不確例）及び「カノ如キノ」（上419）（今昔では、「カクノ如キノ」29例）が存する。「〜如キナル」は不存である。

「如クナル」は、「連体形＋ガ如クナル」が1例存する。（上315）これは、高山寺本不存。（今昔は、巻六1例）

「カクノ如クナル」は、2例存する。（上176 333）高山寺本では、荘子に1例見出すことができた。（二十八169）（今昔には不存。）

連用形の用法のうち、「如ク」については、「連体形＋ガ如ク」が1例（下永44）存する。これは、高山寺本には不存である。（今昔には、計13例存する。）

「カクノ如ク」は、高山寺本や今昔と同様、使用頻度が高い。

「如クニ」は、「体言ナンド＋ノ如クニ」（上337）「連体形＋ガ如クニハ」（上11）の2例を見出すのみである。高山寺

本も亦同様である。（史記・殷本紀に1例存するのみ。その他の類似形については、第二節参照。）（今昔には28例存する。）

終止形では、「ノ如シ」5例、「ガ如シ」18例、「カクノ如シ」4例である。（高山寺本・今昔共に、例は多い。）

その他、未然形が2例、已然形が1例存する。

前稿でも触れた如く、本資料では、「如シ」と共に「様なり」も、多数用いられている点は、訓点資料と大きく隔るところである。

④高山寺本古往来

連体形は、「カクノ如キノ」が大多数を占める。（17 51 91 101 110 113 114 130 146 161 190 197 261 273 391 414）「シカノ如ク（ノ）」（182）もある。（但、「ノ」は補読。）他に、「連体形＋ガ如（キ）ハ」（58 215）もある。

連用形には、「連体形＋ガ如（ク）ニ」が1例存する。（265）

「カクノ如キノ」は高山寺本に皆無であり（今昔には多い。）、連用形「如ク」も稀である。（今昔にはかなり存する。）

終止形「如シ」は、高山寺本、今昔と同様、よく栄えている。

本資料で最も注目すべきは、「如キンバ」の存することである。（88）僅か1例ではあるが、貴重な例とすべきであろう。（高山寺本・今昔には不存）

⑤古本説話集

「かくのごとく」が唯一例である。（山内洋一郎氏編『古本説話集総索引』269頁3行）本資料での「類同・例示」の表現法は、専ら「様なり」が担っている。

以上、聊か疎略な叙述に走った嫌いはあるが、高山寺本古訓点資料に於ける「類同・例示」等の表現法を、今昔物語集や前稿で取扱った五文献と比照することによって、高山寺本の表現法の特色の一端を明らかにした。日本語表現法体系の一部を占める「類同・例示」の表現法も、決して単純一様でないことは、右で幾らか明らかにし得たと思う。

注

(1) 堀田要治「如シと様ナリとから見た今昔物語集の文章」(国語と国文学　18ノ10　昭和16年10月)
石垣謙二「語法より観たる今昔物語集――『が』『の』の用法三三について」(国語と国文学　18ノ10　昭和16年10月)　その他。
近くは、『日本古典文学大系』所収の『今昔物語集』一～五に詳しい補注・解説がある。

(2) 拙稿「院政・鎌倉時代に於ける『類同・例示』等の表現法『如し』と『やうなり』について」(鎌倉時代語研究四　昭和56年5月)

(3) 論語・史記については、『高山寺古訓点資料第一』(高山寺資料叢書第八冊　昭和55年2月　東京大学出版会)、荘子については、小林芳規先生の「高山寺蔵本荘子古点について」(池田末利博士古稀記念東洋学論集　昭和55年9月)を参照されたい。

(4) その多彩さは、先掲堀田要治氏の御論文や日本古典文学大系の詳細な注によっても窺うことができる。私自身も、独自に調査を行って、その様相を把握することができた。

(5) 築島裕『平安時代語新論』(昭和44年6月　東京大学出版会　491頁)平安初期訓点資料にも、「体言＋ノ如クアル」(地蔵十輪経元慶七年点)、(立本寺本法華経巻第一明詮点)の如く、用例が見出される。(築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』、大坪併治「訓点語における『如し』の用法」(訓点語と訓点資料二十八輯)

(6) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(昭和42年3月初版　昭和55年9月第2冊　東京大学出版会)他

(7) 同右注3書

(8) 春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』(昭和17年9月　財団法人斯道文庫　昭和44年9月　勉誠社)
注3書　小林芳規「文法史　古代の文法Ⅱ」(講座国語史　昭和57年12月　大修館書店)

(9) 『高山寺古訓点資料第一』(高山寺資料叢書第九冊　昭和55年2月　東京大学出版会)本文篇補註115頁(小林芳規先生執筆)

(10) 先掲(注5)小林先生の「古代の文法Ⅱ」にも、命令形については、指摘がない。(332頁の表を参照。)

(11) 「高山寺蔵史記　殷本紀・周本紀の訓点における『の』『が』の用法」(高山寺古訓点資料第一　高山寺資料叢書第九冊　昭和55年2月　東京大学出版会)

(12) 拙稿「院政・鎌倉時代に於ける『類同・例示』等の表現法『如し』と『やうなり』について」(鎌倉時代語研究四　昭和56年5月)

〔付記〕本稿の基礎は、昭和五十七年度の鎌倉時代語研究大会での口頭発表にある。席上、小林芳規先生を初め、会員諸氏から有益な御教示を賜った。又、本稿を成すに際し、小林先生より、種々御指導を賜った。銘記して深謝致す次第である。